论。指述的

宰主*郎路生麻



Senryu Zasshi

pensoj flugas trans la land limon

No.261

の句を拾る

郎

麻 生

ところがないが、一見してその重厚 らだと思ふ。牛は象ほどにとぼけた 何んとなくとぼけたところがあるか ない。シャボテンや象が好きなのは は象ほど好きではないが、嫌ひでも だ。そして動物では象が好きだ。牛 植物ではシャボテンが好き

らないと思ふ。 働くことについても学ばなければな あやかる必要があるし、默々として 私たちは、先づ體格について牛に

ならない。

見ろ」と云つてゐるやうに、思へて 戦日本の人たちに、「俺を見ろ、俺を

に火牛と云つて、牛の角に、たいま れることになつてゐる。戰術の一つ 割をして來たが、牛は農耕に驅使さ 馬は從來戰爭をするのに重要な役

> を運ばされる位なものだ。 であつて、多くは後方勤務として物 こともあつたが、これは特別の場合 ひ込み、敵陣を混亂におとしいれる つをむすびつけ、敵陣をめがけて追

を描いた絵馬もかなりある。 じまりであるが、その絵馬も後には いろんなものを描くやうになつて牛 するやうになつた。それが絵馬のは 生きた馬の代りに、馬を描いて奉納 のであるが、それがいつのほどにか 遠い昔には神社に馬を奉納したも

りとしたあの體驅で、默々として働 さにはうたれるものがある。どつし

いてゐるさまを見ると、何んだか敗

をつどめてゐる。 **争に使つた遺物なのである。その点** イに起きた場合に田圃の馬をすぐ戦 馬とを併用してゐる。昔、戰爭がフ 牛は宿命的に田を耕し、物を運ぶ役 肥後あたりでは今でも農耕に牛と

木を運んだのは牛であつた。 れがたとへ佛の化身であらうとも材 闘寺の牛佛の話もそうである。そ

> 紹介して見やう。 よく出てゐる句や興味のもてる句を 十句拾つた。その中から、牛の性格が 句は尠ない。それでもザツト百二三 牛を詠んだ句は尠ない。殊にいゝ

御所車ひもじい牛と思はれず

古句に

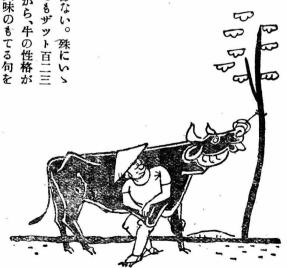
實は行列行進の途上での汚物の排泄 やうなどとは想像もつかないであ てゐる、ひもじい牛なのである。作 をふせぐために食事の自由を奪はれ 誰も考えないであらう。しかし、事 らう。それと同じで、美々しく飾り 者から見るとひもじい思ひをしてる てゐる牛が、ひもじからうなどとは たてられて、極彩色の御所車を曳い ひもじい思ひをするそうだが、第三 ヤミに物が喰べられないので随分と と云ふ句がある。 美衣を纒つた藝者が、客席ではム

> 30 者の烱眼が、そこをついたのであ

皮肉な句である。 單なる勞働にすぎないからである。 はうれしいものであらうが、牛は美 するものがある。人間にとつてお祭 と云うのがあるが、右の句と一脈 しく飾られて歩かされたところで、 迷惑なものは祭の牛ばかり

牛の氣に任かせたやうに牛を追び うしょう

馬は曳くと云うが、牛は追うといふ と歩く姿が眼に見えるやうである。 出しの句である。いかにもの ろく スローモーションの牛の性格丸



るへかきはを鞋草も牛口田栗

(北東)

も面白い。 たら、そしらぬ顔をして動かないの 牛はいくら追うても、イヤだと思つ

草に飽き牛が通せんぼうをする

舍でよくぶッかる風景である。 右側には小川が流れてゐるといふ田 うとれるのも面白い。左側が山裾で、 がコレは作者の主観である。實際を のる訳でないことは云うまでもない 牛が意識的に、通せんぼうをして

つながれて牛は寢るよりしよがなし

が手柄である。 る。牛の習性を面白く句に纏めたの 観たのである。そこに輕い穿ちがあ より仕方がないので寢てゐるやうに は判らないが、闇い牛小屋では寝る う思うてゐるか、どうだか、そこまで これも作者の主観である。牛がそ

雑踏を二つに割つた牛の声

月

がのそく、と歩いてる間、雑踏が一 く間の拔けたものだ。幾ひきかの牛 ある。都會へ出た牛の姿は何んとな たやうに鳴くさまを見ての寫生句で 牛の姿が眼に浮ぶ。そして思ひ出し が雜踏を二つに割つて、悠々と歩く それども賣りに出された牛か知らぬ ある。屠牛場に連れて行かれる牛か これは街頭で時々見かける風景で

> ので、こんな句が生れたのだ。 つに切斷されてゐると街らしくない

栗田口牛も草鞋をはきかへる

である。これから、いよく、街道筋へ り、粟田口と云へば京の外づれなの 田山の口といふ事なり」とある、詰ま 「伊勢参宮名所図會」に「栗田口は栗

不 洞 何 帖

出るので、人も草鞋をはきかへるが

一ドルがなんぼになろが生きんとす 麻 生 路 郞

食卓の知らせへ春の風邪をひき ひさしぶりのフィークとナイラ春が來た 朝の雪農工商の声がする たましてのたより脳溢血と聞く 嫁ですとひきあはされる松の内 まゝ母のきげん元日からそこね

票が悲しき支配力を持ち

である。 られてゐる牛に接したのであらう。 牛も草鞋をはきかへると観たのであ る。作者は實際草鞋をはきかへさせ ふ文句があるが、あの栗田口のこと ところよりくるまは返へしつ」と云 野趣のある句である。 「十六夜日記」に、「粟田口といふ

貨車の牛神戸を指して急ぐなり

と云ふ句がある。

この句などは、いかにも今の時代

見ても、牛として見ないで、作者に 相をよくあらはした句である。牛を

る。方向は神戸だ。彼等の運命は想像 腦裡に 浮んだことは 說 明 するまで ふので、牛肉で有名な神戸が作者の つた諷刺句。」これは方向が神戸とい でもゐるやうだ。ああ、私達は?と云 に難くない。しかも行く途を急いで 貨車の一つ~~に牛が載せられてる トン~~ゴトン~~と轉がつて行く 線に立つてゐると、すぐ目の前をゴ 柳評釋」に次のやうに述べてゐる。 もなからう。かなり深酷な句である。 時は夕暮としておこう。鉄道の沿 私はこの句について、拙著「新川

門出の日牛へも言葉かけてやり

鬼に角、故郷から離れゆく時に、牛 志を立てゝ遠く東都に遊ぶのか、そ 出の日が來た。それは出征の首途 の子弟が、いよく、家郷を捨てて、門 ものである。昔、鹽原太助が へも言葉をかけてやるとこを詠んだ れはどちらであるかは判らないが、 多年牛と生活を共にして來た農家

偲ばれて、情味のある句だと あるが、それに類した情景が 馬に別れを惜しむと云ふ劇が へやう。次に、 ふり向いた こゝが美味いと撫でたら牛が

(奇朗)

その点から見てこの句は時事吟だと の句も今ほどピンと來ないだらう。 が問題にならない時代が來たら、こ を禁じ得ないものがあるが、肉の値 との句に接すると、なんだか微苦笑 値下げ運動をやるやうな今の世相で てゐるのである。主婦の会が牛肉の のるところに、ユーモア味が横溢し は百目が二百圓もする肉として見て

も云へるの

版寫謄 田阪

五町田芝区北市阪大

式株社会 阪 田

番九三六一 鳥福 話電

胃酸過 胃 痛・胃潰瘍に… 大阪・武田職品工業株式會社 ルモザ

45錠入





生 庵

然を云へばちと愛嬌があり過ぎる 千円もしますのやでと酌をされ 薄情があなたの男立てるのよ 消し炭の様な男が喜ばれ 人情話檢事なか~~乗つて來す 兵庫縣

今日刈ろうか明日刈らうかと畦に立ち 精農のさも輕るそうに鍬かつぎ

大阪市 玲 之 介

吾が清き一票のさらすことわいな 御無心があり座布團を辭退する 金策と知らずスナップ紙をくれ 平沢のカケラ心の隅に居り 咆えるだけ咆えさしといてまあ上れ

男 出 生

奈良縣

田

翠

光

西尾には滅多に財布見せられず 鳩ももう遊びに來ない本願寺

男なりけり男なりけり子が生れ 事もなげに産んだ三人目が男 赤ん坊をいぢくつてゐて叱られた 俺ももう一男二女と云ふ子持

横浜市 稲田 Щ 雨 樓

動題朝の

總辭職野たれ死さも評せられ 下駄で行く注射を受けるだけの用 柳路兄を悼む(二句)

東西に同病はげまし合つた仲

浪

敷せると見たかサービス念を入れ 約束は篠つく雨を物とせず 千弗の無心をされた時が花

坐る度立つ度矢張女なり 燃ゆる恋向ふまかせになりますか

天

ビルデングその一室の主なり 草

郎

共稼ぎ途中で會ふてレストラン 魚市場女も魚の匂ひする

しわ白髪女難の相の哀れなる

捨てられる覺悟扶助料取るつもり 吾が恋はソープ泡にさも似たり

風邪心地家の囲りを歩くなり

秋空の爆音君は遠く消え ヨビ髭の君は車窓に犬を連れ 岩崎柳路氏を悼む 滿蒙を縱橫無盡夢の跡

緋の蹴出し風あたつてよし無くてよし ミスハワイこれより派手な柄はなし 一号も二号も猫もみな孕み

夕立に駈け寄るビルのたよりなさ 足らなんだ頃が本当の妻だつた やんわりと吹いて寸志と書き添へる

尼崎市 谷 鮎 美

遠足へ千円持たす父の醉 (二句)

焚火したとこだけ朝の雪がとけ

おめでたい日の針箱が先づ決り 大阪市 田

妄

千鳥足稅務署勤務に御座候 泣いたとて憂さが晴れよか二十八 奈良縣

垣

錦

宮様とならんで伯父の発起人 おこるだけおこつてをいてもう鼾 差押へされても空想續くなり

税金を拂つてタイヤちびただけ 薄情をサナトリユームですねている 岡山縣 浜田 久

米

停電のとこでエロ本折られてい 盲人へジープぴつたり來て止り 税金でとられ泥棒にもとられ 平塚市 村

孤

ミスポリに少し笑へと彌次がとび ミスポリを木石にする警視廳 馬方は馬に冗談なども云ひ ポツネンと山羊が見てゐる朝の汽車 マネキンが美しいので誤算をし 近道はよそうに父の老を知り

コスモスはとんぼの焦れる程にゆれ 紙屑は通過列車のあとを追ひ 大阪府 尾

おもちややはお客が來るとねじを卷き

薄情やおまへんと質屋裏返し 薄情の之も浮世かそれでよし

薄情に出てくれたので今の地位 薄情と見せまいべんちやら上づつて

刑事室刑事自ら炭をつぎ

栞



髙 田 抱 逸

ストせねば今にも死ねるように貼り ほろ酔ひの俺をだました町の寄附 反共を稱へ神主生きのびる

大阪市 市場 沒 食子

恋も亦御破算となる診斷書

思ひ出の街の小山の砂も賣れ 雨の夜出掛けにやならぬ金の件 パケツを下げて馬糞を拾ふ父を見る

若いと云ふ外に取柄のない二号 親に似て策する術を子も知らず

名古屋市 田 水

車

四川もダンスもいける歩きよう

手傳いの襷ほどには働かず

豆くじの隣の募金あはれなり

大阪市 豆 秋

間違ふて掏りなや金のない財布 るびじやこのいのちは桝ではかられて やがてこの自轉車も盗られるならん 雲を見てゐて叱られた十二月

上客は裏のくぐり戸から這入り 十時頃まで禁煙をして見たが 野蛮とはてくし、歩くことかとも

封筒は二十才のころを捨てぬ色 碾臼のようにあととりゆるがない 棺桶のむちやくちやな値と思へども 大阪市

兩の掌をつけば卑屈な吾が姿 世間知らずが世間知らずの恋に落ち ロボットの様に奥様あつかわれ 恋の日があつた写真の眼を見つめ

> 年寄りが死んでお悔み云ひ易し 看護婦のその後を聞けば共稼ぎ

椅子席に坐布團の要る程に老け 秋佗し君のへんくつ暮れんとす

稻の穂をそつと触つた病上り

ふぐシーズン來る

破れ傘はたいてくぐるふぐ暖簾

賣り喰ひのモーニングだけ残してた

三ケ日昼破れたまゝやけど 同權も二日目からは風呂を炊き 麻雀に誘ひ込まれる禮廻り

大阪市

王

病人の俺に何やらかくしてる

今日も又金があつたで無事に暮れ 税務署で息子の戰死も言ふてみた

神様に小さな議論ふつかけた おゝその眼いやだよ俺は淋しがり

さしあたり隣の子供に負まいぞ 長男恙く成長 大阪市

本

奈 子

駅前の夜霧喰へない人のむれ

花

波の音きいて温泉眼をつもり 白浜温泉 (一句)

矢張り親の光り幹事の子が歌ひ ハイヒール音を樂しむ様にゆき

大阪市 水 谷 竹

莊

此処迄が私んとこの門を掃く

滋賀縣 JIJ 春 巢

嫁に行く看護婦嬉しそうにやめ 一人旅鏡臺掛がなやましい

方 Œ

常着着たまゝで表彰りつされる

お寺にも一升びんがいる世なり

廣島縣

津

柳

慶

悲觀しちやいかんと易者になだめられ

奈良縣 崎

でぼちんへ眼鏡を擧げて盲ばん

五十年思へば狹い途であり

JI] 不

水

流行歌大佛殿へこだまして

闇煙草なる程これはいけるわい 出張して官尊民卑を味わつて 又今年も子のオーペの事になり

大阪市

葉

鸠

花

姬路市

笑

討論はいやだ唄でも歌おうか 見合だと言へば髭でもそるものを

下関市

弘

半

亦嫁が見られてゐる盗猫

歡迎はやホーーーで囲まれる

恋愛が幸福そうに二階借り 八代市 佐 野

1

占

子が山一人二人は可愛がり 令夫人避姙の法も知つており

解散かフヽンと俺は麥をまく

世は正に疑獄時代か

あばくだけあばけ明るい世とならば

兵庫縣 沢 史

葉

大臣は勉强中ペースは考慮中

タイピスト嘘と知りつゝ打つて居る

兄弟で親のズボンを穿き破り 檢問所仲居少しも驚かず 兵庫縣 小 西 無

鬼

神様を鈴で起こして頼んどき 大道へ犬の粳相の大膽な

神戶市

由



男にもなれぬ男の子沢山

君と僕未來を約す飯を炊き

JII 聽 松

インフレに娘一人を働かせ

大阪市 田 斜 . 水 曼珠沙華の如咲く日を祈る未亡人 日本地圖胡瓜の如く横たはり 服務規律守り通して無能なり 野暮な恋イエスかノーか聞きたがり

外交も社交も知らず今日も暮れ 朝刊はまだ入口さ日曜日

豫防注射仕方ないよな顔斗り お茶を飲み歩き疲れた純な恋

官製の煙草めつたに買ひません 新居浜市 間 小

ライターの石へるばかり待ちぼうけ

高槻市 島

舟

つんぼうの滿足一人喋つて居 好いてゐる證処の樣に雨に待ち

五十ですこれで初恋とも云へす 灰木市

Ш

三男はさぼつて伊吹へ行つたらし

アドバルンの下で迷子をまた見つけ

高槻市

岡

田

雲

ヒステリー猫へ御難の日がつゞき 布施市 本

醉

月

何で儲けて居るのか夜警寄附も出し 税金を拂ひに映畫観に行こう

総遠く口紅ます~~濃くなり 布施市

乳パンド締めてネオンへ無表情 借金に組伏せられた夢を見た

鶏よ今日から皆がキビ粉だよ

勞組の諸君、案山子を見給え

失恋と云はずあつさり辭めて嫁き

愛姒縣 月 原 宵

商人の眼は來年の春を追ひ 一藝に秀でゝ平凡なる社員

何見ても驚いてみる十八九

樓

いつからか迎へぬ妻となりゐたり

下松市 山 根 白

あすあるを信ず若さのさようなら 草野球審判官は肺を病む

自由です母は淋しく言ひ負ける

北風よおいらの父をつれて來い

來客へ父母ちんまりと仲がよい

大阪府

瓜

平

手際よう炭つぐ妻の世帯馴れ

球

尼崎市 早

岡山縣 山 分 北

路

結局はこんなものです倦怠期

明

俄か雨香具師とさくらが荷をたゝむ

からたちの垣の内なる元地主 星

3 ż を

瀬戸市 木

銭湯で会うと案外やせてゐる 父の名をハガキに書くと他人めき

儲けない父の帰りお這つてくる 生活を夜中にさめてふとおびえ 熱いかと妻はいち~一聞いてすえ

伊丹市 田 垣 蝸

4

鐘三つ風呂できたへたのど自慢 いいわよあんたの子なんか産みません

パンパンも一風呂浴びてミシンふむ

群狼の様に夕刊賣來る

大阪市

淡

舟

農家の皆様もお芋は要りません

科學的授乳と言ふへ祖母不滿 **廣島市** 石

原

伯

今更に父の苦労と母の愛

市

東

田

晚

Ė

喜びの轉る様にイモが掘れ

秋風に追るゝ如く嫁ぎ行く

三度目はお茶も出て來ぬ應接間 市

甦

光

松山市

前

田

伍

ある時に女の瞳豹と見る 大掃除また劍道具邪魔がられ

大阪市

雨

雲は往き雲は來りて秋さなか

星飛んだやらうとこども駈けてくる

老年の苦労掌眺めて居 白淡にて(一句)

裏作の仕事に勵む十二月 番匠山湯崎白浜見せるとし

砂糖壺の前で敗戰想出し 清水市 雷

#

野

鞍 馬

この暮は羽子板の値に驚かず スクーター、スアンが泳ぐようにゆく 大西鄕下を眺めて淚ぐみ

エプロンのまゝで師走の町走る

床の中で一人で寝返りが出來るほ母堂が重態であつたが、年末には

されたV岡村路三氏(山口縣)は

選評は路郎主幹▼福田妄夢氏へ大 川柳が採用されることとなつた。 下関駅文化板に「駅頭の正月」の 弘半休氏(下関市)のきもいりで 下松支部句会へ出席される由▼國 として迎えられたので一月四日の 氏(廣鳥縣)は下松支部生みの親

當級化粧料容器には断然!

大阪市西成区玉出本通

丁目十三

澤

田

四

郞

作

株式會

ヤマギンの……

さんを儲けられた▼田中辰二氏は 阪) は十二月廿三日に長女えい子

熊本坪井局区内池田町稗田に轉居

不朽洞會から

謹

賀

新

春

(柳人交級のページ)

不

朽

洞

れに二泊三日で白淡温泉に遊ばれ 本線雨氏は美奈子さん同律、年忠 に忙殺されてゐられたとの事▼橋 トの事情聴取と今後の方針の協議 氏(平塚)は釧路へ出張、炭礦ス 代支部も同所へ移つた▼木村孤浪 に轉居された同時に川柳雑誌社八 氏(八代市)は淡成町六一四番地 に復することと思ふ。▼佐野卜占 あるので近い

粉來には

戦前の

状態 支部のため、いろく、腐心されて ルルの不朽洞会員間の連絡や川雜 四日に長男徳(のぼる)君を儲け ただ言葉なく眺めてゐ」の一句。 つた。美奈子さんからは「絶景に 勝帶をゆるめて食ひなおし」

とあ た。十二月七日附の句信に「宿の ▼上田翠光氏(奈良縣)は十二月

> は川柳不朽洞会を代表して十二月 退かれることとなつた▼路郎主幹 出來ねといふ訳で一時不朽洞会を た大阪市文化圏体協議会に出席さ 十日デモクラシー会館で開催され 施市)は近來俗塵にまぎれ句吟も 科に勤務された▼坂井楠水氏(布 幸君を儲けられた。▼北川春集氏鳥正則氏は十二月十八日に長男英 ごに快方に向はせられた由、 (滋賀縣)は大阪鉄道病院第二内 ▼福

> > 北通四ノ二九

武

部

香

林

武

大阪市東淀川区三津屋

t 新 숲 員 紹 介

藤田 高 + 野 Ш 天 井 抱 H 蛙 風 氏 (岡山縣) 逸 氏 氏 (似口) 久米雄氏紹介 **华休氏紹介** Œ

長

光 氏 0 吳 (大牟田市) 維

林

野

甦

+

月

洞蘆 私 氏 (大阪市) 路郎主幹紹介 総雨氏紹介 大阪市) 正 大阪市) 正

自適される事となつた▼弘津柳慶市の合息のところへ轉入され悠々

を草紙洞とされた▼高沢一浪氏へ

▼吉田水車氏(名古屋市)は庵号

和竹

久 田

ハワイ)はワヒアワからホノルル

で彰子さんに改められたとのこと 長女弘子さんは当用漢字にないの られた▼石原伯峯氏(廣島市)の

大阪市城東区蒲生町四ノ七一

竹 內 内 花 潮 子 花

奈良縣高山局区內北倭村字高山

清 水 良

祐

Ŀ H

白

香

克

川雜日立櫻島句会幹事

球

大

村 孤 浪 麻 麻 生 生

五ノ二五 大阪市住吉区万代西 葭 路 乃 郞

平塚市馬入二九〇九

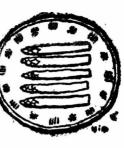
木 宇陀郡 三本 松 村 向

奈良

縣

大阪市生野区南生野町ニノ七八

翠 光



柳 流 樽 0 家

富 野 鞍 馬

七十二編賤丸政丸風松松歌

生きがひがあつて風雅な道をき 佛心に至るまで嫁ふみこたへ 六十二編に二世川柳の選に 六十七編の文日堂在世追福

といふことに就て、一寸興味

柳樽に女の作家があつたか

を感じ全編を調べてみた。

十四編に安永八年春の星運

豊高水鶏五十はお慈悲なり 七十編に賤丸 六十八編に文日堂選で (後の四世川

二十七長屋一ばん手ぶつてう 女湯の溝へ流れる子の手桶

何れも文日堂系の女性と思は 女姓が見える。これ等の人は といふ様に文化年間に五人の れるが 文 政 まで 続いてゐな

表徳は見当らない。

めりやすはいれご足袋屋はい

うわの空足のぶらつく奴凧

三十六編に文日堂選で

から三十五編まで女姓らしい 天明期の紅一点である。これ してゐて相当の作家で安永、 といふ女姓を発見した。この

り上げ

Ł

まあうんといっなんしよとつめ

木連木綿主催の會に入選 十七編に天明二年春上野櫻 つらいこと花莚の上で四ツを聞

新造を冷水が來てあげるなり

句合に入選してゐる。 堂と薩秀堂との共催の角力

人は神田三河町の杜若連に属

下戸が箸とるとあらしの機鯛 七十一 編に三世川柳等の選

> 夫婦別あって妻はお供なり 浅黄より柿がいきだと裾つ継 産れると七十五日無常門

木に人をならせる村の花角力 **羽織の追込座敷さへ勤めます** 飛蛙鏡が池を曇らせる

芋と関子とならんでる下女がつ 外に四句 七十四編に賤丸、 里鳥選で

打出しに遠卷で出るうつくしさ

虫は啼く草は芽をふくれはん頃 棺屋から市へしらぬが佛なり 捨てる髪助ける舟の命網

ろから考察して、長刀もヤワ 選が見え、この鉄扇女は三世 間短かく七十一編だけにその 徳の女が現はれ、健吟振を見 ラも発許の腕があつたかも知 る男のような句を作てゐるこ に縁のあつた人かとも見られ せてゐる。三世川柳は立机期 と文政になつて男の様な表

> 阿倍野區旭町三丁目一四 謹 賀 新

西宮市外甲 風 関住宅地

春

(柳人交紙ページ)

須 崎 豆 秋

鳥

Ш

元日の心はまるし置炬燵 田 水 車

菊

澤

金網製造販賣及とうし

目六五 電話 東四八八六名古屋市千種区観月町一丁

王子町三ノ三四大阪市阿倍野區

大阪市東住吉區平野

子雨

濱

田

久

米

雄

岡山縣和氣郡吉永町

西之町八三

ました。

美

轉居いたしました

川柳雜誌社備前支部

幹事

濱

田

久米

雄

岡山縣和氣郡吉永町福滿

電話三宮三 七五九番車区神田町七十九番屋敷神田町七十九番屋敷神田町七十九番屋敷

喪 中年賀欠禮

大阪へ這出す夢を捨て切れず

名も柚味噌に釜の蓋をとり

田 不

山村永山町十北海道上川郡、 一永

阪 急 宝 塚 線 雲 雀 ケ丘 下 車兵庫縣川辺郡川西町加茂平塚六

德

永

雅

大阪府乾麵加工工業協同組合

副理事長 尾木合资会社 曙川食糧工業所自宅大阪府中河内郡曙川 村八 西 尾 巖

葉

鳩 花

七一番地大阪市城東區蒲生町四丁目

白魚も一寸八分宮戸川

玉づさと女郎の文はうらおもて

四十六編にやはり文日堂選

末番まで詠んでゐる。

二十二日の会「戲場」といふ 八十八編に文政六年十二月

死を悼む数句を思ひ出します。

て、その作句振は男も及ばぬ であるから中性的になつてる たものであつた。こんな女性 んでゐたのでつけられた洒落 て、父が常に「オーイ」と呼

郎花連の句會賤丸等の選で れない。 嫁 同 同 角とれて丸くふとつて宿下り しうとめのかいたからしに嫁は 八十五編に文政七年七月女

而して後にと儒者の大晦日 鬼の起請は羅生門から出 お茶びい話の先の枝を折り

やぼ男つい然者と文に書き

梅幸茶ちつとお化も古かろう

四十六石屋同値のつもり書き 題で四世川柳等の選 十五日の会に「忠臣藏」の 八十六編に文政八年五月二 外に四句

下路1

勘平はその手で門の戸をたたき

火石も小浪にゆれる新まくら

手で、酒も煙草もいけるし、 筆を持てばその良人よりも上 家に嫁したのであつたが、画 うに感じられる。前にある画 句を始めたのは父より先のよ と共に前旬を作つてゐた。作 師葛飾北齋の三女で、父北齋 た。エイは彼の有名な浮世絵 と素晴しい健吟女性が現はれ

> いといふ腕で、北齋筆と傳へ 身で北齋の最後まで面倒をみ 縁になつて、その後を獨身で ふような訳で変り者だから離 あまり別嬪でもなかつたと 画の方の号は「王爲」といつ 筆であるともいはれてゐる。 られる春画はこのお榮さんの た。美人画では北齋に劣らな のた父北齋と共に、自分も**獨**

れ しょうかい しゅうけい 知格 ぜりふ 拾つた しののわけが知 定紋は二斗四升目の新之助 芝居では鰭のある筈雑魚場なり 俳優の縁も出雲で結ひ始め 題で柳亭種彦の選に

吟であつた。 ら作句してゐたようで仲々達 この女性は後の五世川柳佃を付きるの女性は後の五世川柳田 の門人でお榮さんより古くか

鬼

堂

鍼

院 本

鍼医

糸 療

清

德

夷

笑

寛大であれ、

佛の餌よ、

初詣今年の無事え掌を合せ

山

根

白

星

気ですか。私こと十月はじめより 切さん」などの句、それから愛犬の にも家主の犬をかんで 來 た」「石 出來ません。豆秋さんの「けなげ と申します。犬に関する句が全然 仲よしです。黒の雄です。名は黒 んく馴れ來て今では子供達の いましたが一晩泊めた翌朝からだ 愚妻や子供達も最初はこわがつて - 家迄ついて來よつたのです。 ざも、しかれざもはなれず、とう 実は自轉車の私について來て追へ が、なかくくそうではないのです 水さんに云はれるかも知れません 上げると財産が出來た証拠だと斜 犬を一匹飼つてゐます。と申 以來お目にかゝりませんが、お元 豆秋さん。先生の湿豚祝賀大会

愛綏縣津倉局區內役場內

明石遞信療養所 川柳会神戸市垂水区玉津町水谷

大阪市西成區松通

九丁目二

干三

鶴 者員喜

入職 所 人人外

井

文

蝶

土

同同

樓 愛媛縣越智郡櫻井町

JI]

柳小女郎

吟

社

在

間

中須 賀 花 園 街愛媛縣新居濱市

月 原 宵

明

鈴 木 み ट्ट を 本年もよろしく御指導願ひ

湘戶市陶原町三丁目五〇番地

布施市三ノ瀬一丁目四雅 號 (醉月)

河 村 日 滿

鳥取市叶三八一川柳日の丸会

古市大道四丁目五十一大阪市 (都島局區內) H 番旭區 穗

仁江川柳美松吟社

渡

辺

曉

童

山口縣下松市旭町二丁目

大分縣豊肥線中判田駅前

吳市吉浦中町一丁目

林

野

甦

光

桑

原 号 儀 郎

日田市北反田三丁目 田 信

小

大阪市西区九條通三丁目

定

美

金

泣 いて

出た劇

場

前

樣 身

3

n

て市

Ø

ح

計 伏せ þ 若 てそ 3 1 0 は 眼 < 數 は恋がしてきた C 賣る風の中 を持ち忘れ 大阪市 草 同同

字 頭 て の せず ŧ 食 盛 べ る事 の無神経 いかまず がもと 同同同 同

鰻

P

K

ž h 大阪市梨 里

嘘

吐

ŧ

者

ほど動

3

y This is

タクの

客ころくと

着

ぶくれて

同同

ρ 匂

pen

を

聞いてるもらび風

呂

場を出て笑ひ がまぶし過ぎ 同同同

> お 遺

榮 逢

轉 曳

十二月こちらが欲しい寄附を出し へしてやりたい人にう勝たす 鹿にされ 同

同

片

娘ばかりなり

先づ集ればやせたい

か 局

は

質などに馬

市文 庫

ね

だる

時

だけ

は

の 人

こちらこそ正しいと

言ふ

声

明

浪

費 叱 つた口で吸ふど

1

ス 書

ば

租

P

寄

附

困

3

O

は

桁 12 ひついて來をうな文句ストライキ

由

おどな

6.

妻君

主

握

つてた

大阪市葉

光

米 行

のこぼ

n

が寒い駅にする

背中に屋台は火を起

L

ょ

þ

先

K

雷

球

案

C

6

n

ぶ を 政同 同 同

>

母

の 權

背

也

同

ふたありして歩けば処女でない姿 冬そこに來たかのように火を囲

小 松

n

ア

百

母

を

整

カン

を が

す

ば

で 律

あ

る

强

かり出來 せ

トラン

同

だけの椅子

組 街

る

雨 鬪 n 妹 女が情夫と家出した 1: 15 スだけに夕 タン は 農 P 恋 家は忘 スし 12 つて居 陽あり れられ U ł 兵庫

JE

司

Ł

15 5

T

氣

安

4.

甲

子 押

同同

行進か

は映画観るつもり

横

K

年

家

革

Ø ^ b つ

ジ

ヤンパ

が

主

な

同同

か

せ

女スカート

5

8

こほろぎが鳴

いて冬

物つぎを当

τ

布施市愛

j ŧ٥ 運 轉

占

8

£

す

名古屋まさ

引か

同同同

端

はあなた

任

せのスト

ライ

同 同 万 み を な 夫 6 よく ろ 3 先きで子が は て 子 鰻 重 燒 張 ح < 神戶 市 鐵同同同同 =

父うちやんの度胸駄菓子を百円も 鰻やを氣のあかん子が 4. にきた 顔役 忘 つ n か佛壇 凝 嫌ひ抜き つたもの め 鳥 市 白同同同同 滿子

可愛 俵 以に六つ いことを聞く夜かな 忘 n が買 て 同同同同

役所の下ツ端の判えル を は犬の散歩に名を借りて 遗 惡 む一人に彼 女あり 岡 山 七面山 同

北風へ君と僕とのソバの味妹をどうまちがへたかスナツア屋

こがらしよ吹け吹せなる私は待つ

人も

て來てゐるプロ野

球

京

都

市

情 ٧

の

深さを

3

<

る口になり

想ひ 嫁ぐあの 娘へ ける つもりでない 白 粉 登 間に合はず をつけ 同

スけば 1里の様に 生 ŧ てを h 定同同

娘の聲になり 和 服 大阪 市

美

同

同同

の

音

8

段 ŧ

哲学書讀んでるところ見せたがり 亡人 クリー に 金 哀 ンから抜 持 れな眼つきし 0 たと H 出たとうに歩いて見 解 て見 んせる

生 置 る話ぶり

< F 宿 熊本縣 夏 同同同 生

布施洋 海洋 大改 同 同 同

競 花

同

甫

同同同

やがて來る燒場あたりの花がす

院

の

Z

で

母

は

寄つていき

姬

市

揚

北

風 か 0)

に

枯

木

冬

の

詩をうたふ

待

つ 3

火

葬 は

夫

の

粉

煙

姿

農

夫の

子

が

走

3

丸

亀

市

浪

事.

れどもえらいです

子

白

米

を

見

る

大阪

市

良

思

子

同同同

をきか

のかけらが

残 るうれしさよ

大阪市

花代子

店

た

包

ける

Ħ

病み上り陽も はづかしい

しいものゝうち

程

任の月給

叉聞

かれ

今治

市伶

٨

でない

方の顔写される

哲

彦

書の

廣

さもてあまし

ぐに取りに來いとは腐りか ス吸ふあいつは何をする奴ぞ

日

品

の水

を入

大阪市干

舟

捕手の面二三度ぬがすねばりよう 柿 母 反 抱きしめてやりたい此の手肩へ 置き 母 僧本街 コスモスはの娘が拗ねる様に揺れ 子. ノーマネーを見透してゐる女の目 しんがりで 走る たまには十円の夕刊も買ふのです 出をさせた 其の 手で 税を取り の木の 壽命に負けて老 父 死に 逆 づこ迄 みなれた土 が出たあとへ大きな雨 錄 校思へば 0 堂 沢 H へ女 山持 のごとこそこそと 人を 恋ひ 息ちと酒くさい 間 明日は何 香 くらしの 久 1 < 小 使さんも眼に浮ぶ 戦 地を離れる 政 界のぬかるみよ だといふすがた 業した 我が 子に苦 笑ひ 嬉 l のヤモ暮し 阿彌陀經 ح 朝 夫 な 折 の音 の客 兵庫縣齊 今治市 石川縣光 和 鳥取市穂波子 高槻市 歌山宏 同同 同 '同 可 同同 同同 T 同 花 風 方 郎 路

西宮市鈍

眛

サービスのコーヒ断ばるこスポリ 喫茶の灯刹那主義者になつたろか 兒 子の科 ハンサムと言はたモボが病へて居る 嚴 長 鏡獅子の様パーマ颯爽と通り過ぎ 女 お おみゃいの婦人倶樂部一通見て渡し 同誰 女 r 男 電 操 代こんどは何を賣るつもり 乏をわざとする様な書を愛し 11 あり或日 性 火御見 の方 が巡 を スしに 13 を米と替えます未 12 の娘へ聞 に憧 0 草喫ふ娘に一家さゝえられ 学破 物 なっ 軳 に恋愛小説讀みふけり す 四 先づ 查 食ふ音が響 b: ケチを西 ns + 5 へふつときもしい 壞 妻子に を養子の τ 舞の字も 堅氣をあ て唇 女 主義者の如く見へ < かすギターなり n 男 ح 処致 てミスポリ る女客 しま 看 * め くなり 亡人 Ġ n カン H 嗤 てゐ 板 屋 ひ す 1: け 來 ス 置 **今冶市**晴 島取市栄 兵庫縣天 大阪市薬 大阪市桃同 大牟田 鳥取市 鳥取市民 岡山縣笑 Ŀ 愛媛縣 堺 大阪府き 新 秋田 田市 居濱默 同 風同 同 重 同 同 同 同 同 同 吐同 B 同 司 はち 夢 浪 美 行 夫 平 晴 紅 雄 村 平 帆

市 松 枯子繼私変直 草母ど姓友辛日花墓出官 弟日十

どん底の昔ならした髭を持ち息姓変へた女も好きな道へ生さ石友情が古びて殘る柱懸け愛辛抱の足らぬを運にさせて置き日本着二世やつばり日本人、日本 おりる 時丈け女女めき 食つてゆけるなら下宿もいゝだろう 写真屋は上向け下向け の死後 勤簿時 焼けしたお 顔をはてコンパクトニー月 陳 情の 手を 替へて 見る 吏と 0 活石 でない初 權もいゝが喫はずにをいてくれ の 口へ意地がきたない兒の仕草 らで ジ母はあたしが説きまする 貝と は値段 だけ 鯖も 『 1: Ø 罪 はただ箱庭 え巡 もう 叱らなくなつた父 名古屋正 ん 强 計に一べつ吳れて捺 かうよな 荷を派 手に積 上げる 時文け、七等が 打者球 子供が で で の手を替へて見る 好きな道へ生さ石川縣夏 は解 見 未 を探してゐ の松でした 風に 背 知つていた て めました だ白く えら 面 白 ・ 岡山縣弓削平 同 活 L 東京都武 佐賀縣八 大分縣表 貝塚市 愛媛縣旭 愛媛縣早一 鳥取市 順 同 長野縣柳 大阪市野 大阪 鳥取縣夕 ハワ 大阪府 大阪市惠 愛 大阪府木 媛縣曉 イ流 哲 水 兒 步 明 草 草 水

ぼくの仕事であるユーモア文学と 批判が生れるのだ。この立場は、 そこから川柳の諷刺とユーモアと 同情はしてももらい泣きはしない

相違をみ、ぼくが今日の俳諧的川 こゝに川柳の本質をみ、俳句との モア文学の一類とみなしている。 おなじ立場で、ぼくは川柳をユー

中

生

K

本

南區北桃谷町七二

伊

呂

(柳人交欲のページ)

柳にあきたりない理由がある。

柳 Ó は ユ 類 1 モア

川柳にもいろいろ流派があるそ 宇 無 愁

。 そうして柳樽なごをよみかえし てみて、はじめて川柳の本質にふ かないものが多いように思われる 外漢のぼくにはわからないが、た れたような氣がするのである。 ぼくたちには川柳とも俳句ともつ まに目にふれるいまの川柳には、 の相達から分立しているのか、門 柳の各流派が、ごういう理論

批判の矢を放つている。そのゆた ゆたかでヴィヴィドであつた。 くとも今日の川柳作家の誰よりも らのとらわれない批判精神は、少 のせいでやむを得ないだろう。彼 のがあつても、それは時代と教養 かな批判と諷刺が低俗猥雑で、い せざるをえない自分自身にさえ、 建的な権威や虚飾のなかに膝を屈 殺している。時には、そういう封 は封建的な権威や虚飾を痛烈に笑 神をもつていたかにみえる。彼ら ちの方がはるかに自由で奔放な精 くらべると、柳樽の無名の雑輩た がちはいいつもぼくをほる笑ませ まのわれわれにはあきたりないも る。いまの川柳の常識的でコンヴ エンショナルでなまぬるい表現に じつは江戸三百年の太平になら 古川柳の警拔な観察や比喩やう

象をもつているはづなのた。批判 川柳家ははるかに自由で奔放な精 つた江戸の川柳家よりも、今日の た禁令づくめの幕府の支配下にあ の自由は、憲法によつて保証され れの方がはるかに豊富な川柳的対 された彼らよりも、今日のわれわ 神をめぐまれてよいはづである。 役人の子はにぎにぎをよくおぼ

字でも、冷靜な知的な客観的観照

川柳は詩ではない。形式は十七

とはみとめてよいと思う。 精神によつてつらぬかれているこ 形式はとも、かくその本質が詩の らくおくとして、俳句は(むろん

つている。第二藝術論などはしば に十七字の形をかりた散文だと思

ぼくは、川柳は本質において單

いあげられた短詩だといえよう。 感情の燃焼によつて主観的にうた 芭蕉以後の)少くとも俳人の内的

年後の民主日本においてますます この有名な柳樹の句は、百五十

象におぼれたり没入したりしないの距離と高さとを保つている。対

である。つれに対象との間に一定 川柳的観察の立場はいつも傍観的 みられない。

俳句が私小説であるにひきかえ

新聞記事だ。そこには詩の精神は 散文である。いわば一ばん簡潔な から生れた一つの批判をふくんだ

> 光彩を放つてきたではないか。 つなみの町のそろう命日

知的で冷靜で、冷酷でさえある。

教育のスローガンであり得る。 のもつ諷刺と批判はそれ自身興論 命日」があるはづである。 諸君の周囲にも、きつと「そろう びであり、新聞よりも卑近な民主 の声であり、ヒユーマニティの叫 はまさに無限の宝庫である。川柳 けで、平気で青酸カリをのんだ。 生局と書いた一片の腕章をみただ たことがない。銀行員は東京都衛 もるためには、一銭も出そうとし 然の暴威から人間の生命財産をま つたくせに、日本の宿命である自 作るのに互費を投じて惜しまなか のれを殺すための軍艦と飛行機を てきた。軍閥政府と國民とは、お きた。生命の蔑視が平然と行われ よる人間の集團的殺剹を経驗して た権力者と自然の暴威と無智とに れわれは日本の國土の上で行われ と、應接にいとまのないほご、わ 災、震災、風水害、帝銀事件---この十数年間、戦争、空襲、 敗戦後の世相は、川柳家にとつ

鵜 の 性

藤井

友

築山快夢起

古川魔花麗 高澤一

Ξ 岩

輪

晚

翠 石

名古屋市中區幸樂町

浪

Щ

哇川 支部

ウ

1

u

1

社

內藤草一

郎 郎

川下 関市

F

朤

支

部

吉

田 水 車

に天然記念物として厚く保護され 期には一万を算し壯観を極め、現 な鵜の池を見た。此処の鵜は繁殖 多を廻はつた際、鵜の生息で有名 かましいものである。先き頃南知 によつて訓練をされなか~~にや 良川で使はれる鵜は由々しき鵜匠 と言う句があつたように思うが長 にぎやかに鮎を吐かせる長良川

> 岩崎 國弘

勇 4

記 休

紫 穗

蓮

多

田

波

中村九呂平

今 住

岡

今

生

下關驛運轉部

森 口 田 郎

自宅 大阪市外藤井寺町岡三九大阪市北區宗是町大ビル三階勤務先 天滿自家用自動車組合

道頓堀川柳會同

堺市浜寺諏訪森

矢

同

南 南區難波新地二番丁 阿倍野區昭和町東 南區難波新地二番丁 南區阪町十七 區西櫓町二十一事務所 和歌

一ノ七

電話南三二二九 田

東京都港區芝南佐久間町 高 須 啞 味

東京都臺東區豊住町十一 伊 山 志 田 孝三郎 二ノー八

大阪市南區西櫓町二 静岡市中田町一ノ二〇 路 合 星 洞 醥

田

脇

陣痛の最中だが仲々卵が出て來な

ふ。雞はと見ると、もう産室で

い。「何時もより選い」とAさんス

テツキで小屋をトン(「叩いたり

出來るのではあるまいか。尤も長 鵜の習性として先天的に魚を捕ら 別な技術的な面からもあらうが、 であるがこ」で問題は鵜が魚を吞 る所がある。以上は案内者の説明 ると言う一寸人間界にも教えられ 子供に與え、それから父母が喰べ する訳になる。父の鵜は毎日海へ 三ツの卵をかへし三羽の鎌を育成 れないと思う。 記のような蒸当をさせるのかも知 良川のそれは親となった鵜ではな え咽喉のごこかに蓄えて置く事が のみに止きらず観賞用としての特 相ながそれは單に吞み下さない事 教えるために相当期間訓練をする す点で、例の長良川ではその事を み下す事なく持つて帰へり吐き出 匹をのごに入れて単に帰へり先づ 飛んで鮮魚を捕り、一家分即ち五 夫一婦主義を厳守して其間に必ず てゐる。その生態をみると鵜は い点からみて父性愛が自然的に上

驷

尾 崎 勢

峰

さかい、こうして産むのん待つて 見たら、一個分だけ隙があきよる をかける。「病人さんの 見 舞に卵 まんれん」と云ふわけ。 持つて行かうと思つて箱へ詰めて つてゐる。「お出かけでつか」と声 手に雞小屋の前で思案額をして立 今日はやがてもう産む時間だと 盛裝したAさんが、ステッキ片

> らしよる」と人さんがぼやいた途 様な雲がAさんの背のあたりに浮 ツキ振りく、出かけて行つた。深 つた、行つて來まつさ」と、ステ れて、「これでうまいこと揃ひよ 手を突込んで取り上げると箱に入 残して立ち上つた。Aさんは早速 立て乍ら牝鳥は薄茶色の卵を一つ 端、コケツコーコケツコーと騒ぎ てゐる。「今日に限つてえらいじ しないな」と云ふ様な顔で氣張つ 腕時計を見たり、難は「えらいせわ い秋空に風に吹かれたハンカチの

無 題

安川久留美

金沢

寒いのにさる市場の前を通つたら

山人が見たら歌にしさうである。 たら「夏」でなく百匁でした。蜀 チョークのあざやかな字をよく見 二四五十銭

野放しの鵜も子のために魚を吐

車

夢を夢みる

—二三·一月稿—

生 梨 里

言はれるが、確かにさうだと思ふ近 頃の 若 い人は現実的だとよく 豊かにしてくれるのだから、せち味で夢を持つことは乏しい生活を 世間がこうせち辛くては現実的に 夢と言ふ言葉がとても好きだ。 きと情緒があると思ふ。私はこの 辛い世間であればこそ、余けい夢 ならざるを得ないが、然し或る意 夢と言ふ言葉は何かしらよい夢

> にならないではありませんか?。 生活が貧しくとも少々辛くとも苦 と現実とを逆に考へたなら日々の 流れてゆく。

> あゝ何と言ふ気持の に開いて窓辺には小鳥が來てチロ な朝風、枕許のバラの花がきれい よい朝だらう。と若しこの様に夢 くしさへずつてゐる。白い雲が

をゆすつて入つて來る。ゆるやか しい陽の光がピンク色のカーテン に住む女王様かもしれない。暖か しこの夢が覚めたら森の中の宮殿 を見てゐるのではないかしら。若 なつたやうな氣でゐると一寸樂し 思つたり、或はシンデラーにでも か。自分の考へてゐる事が仮へ現 を持つ必要があるのではなからう い羽根布閣の中で目が覚めると美 考へる。私は今永い々々ながい夢 実出來なくとも今にも出來さうに いものだ。又私はよくこんな事も

アメリカの駆虫薬・ナニ指腺虫・サロ 虫 のほどが マックト マック・マックト マック・マック・マック・マック・マック・マック・マック・マック・マック・マック・

中部 英鉱内 上 林 粗 影	山 本 葉 光 阿倍野局区内王子町二ノ五三	東京都品川区西戸越ニノ八二四	大阪府中河内郡大戸村 上石切三六一 不 水 櫻 川 不 水	(方) に対して、	追病院第二內	自宅 大牟田市瓦町二四 高 田 抱 逸	赤 田 里 十 九 里 十 九	東京・目黒・柿木坂一三一堂 主人 石 原 青 竜	高士野鞍馬	吉村 靜一路	吉村 南風 郎	山野ラギオ店内 山野ラギオ店内 星 登
高峰柳兒野縣須坂町六六七	佐賀縣松浦郡山代町楠久九二二	尾 崎 勢 峰 海洋人改メ	字 相北部 二二八 宏	小 西 無 鬼兵庫縣多紀郡篠山町小川町	事 賣出張所 專 賣出張所	八代市淡成町六一四	西 垣 錦 風 管原九○○番地二八 奈良縣生駒郡伏見村字	横浜市保土ヶ谷区岩崎町一〇	兵庫縣米上郡沼貫村小野	大阪市阿倍野区北田辺町三四三	西 いわを村 松 夢 裡	日本樂器製造株式会社大阪支店大阪市南区疊层町四十五番地

午後七時すぎ川柳不朽洞会の理事 「炭」「夜中」。自分の好む題を選 場に戻つた。 時半一齊に盃を伏せて、再び句会 場に戻つた。 時半一齊に盃を伏せて、再び句会 場に戻つた。 時半一齊に盃を伏せて、再び句会 場に戻つた。 市題が三つ出てゐる。「薄情」 「炭」「夜中」。自分の好む題を選 ルでる方。」。自分の好む題を選 を持たることと規定さ れてゐる。「薄情」 お腰を据えて作ったくしと、 引返へずには電車がない。さあさ をしてゐる人もある。もう大阪へ こんな筈ではなかったがと云ふ顔 第一次締切が、十二時。第二次

といふ訳でないことが次のページ いものが必ずしも住吟を多く生む 果を檢討して見ると、作句数の多

選句は後日、

私がした。その結

て居ります。

の二十三名。幹事役は 天 手 古 舞り遅れがなかつたらしい。集るもうに、はしやいでゐる。一人も乗来た。まるで学生の修学旅行のや

** 大阪の一行がドヤイ (とやつて | 大阪の一行がドヤイ (と へ も う 真 ツ 暗 だ 。 幹 事 の 竹 青 が と 、 も う 真 ツ 暗 だ 。 幹 事 の 竹 青 が と 、 も う 真 ツ 暗 だ 。 幹 事 の 竹 青 が と で の 日 脚 は 早 い 。 五 時 を 過 ぎ る 万同 山房徹夜句會

催 主 會洞朽不柳川 夜日七廿月一十年三廿和昭

締り と明六時。十二時から午前 ・ と明立は、豆秋、白柳子、里十 ・ と明立ないだ。そろく ・ 本の六人 ・ と変をあげるもの、第一着の ・ と明子、里十 ・ との、第一着の ・ との、第一着の ・ との、第一着の ・ との、第一着の ・ との、月 ・ との、日 ・ にの、日 ・ にの、日

炒ないこともうなづける。栗のやつとめた人たちの作句数が比較的のやうに、炊事や会場の世話係をけた人たちの、良香、梨里けた人たちや、葭乃、白香、梨里 來やう。同じく多の入選句数について うに、れむたがり屋はいつもの腕 数がウンと減少したのもある。 、、と減少したのもある。翠想の句があるために、入選 同じく多く作句してゐ

部締切った。 「薄情」の作句者は没食子(一〇一句)性々に三元句)要件(一八句)かに「一句」の作句者は静句、「一一句」の作句者は静香(二〇句)「夜中」の作句者は静香(二〇句)「夜中」の作句者は整合(二〇句)「夜中」の作句者は一次の一次。(三人句)を持って、五〇句)を持って、五〇句)を持って、五〇句)を持って、五〇句)を持って、五〇句)を持って、五〇句)を持って、五〇句)を持って、一〇一句)を持って、一〇一句)を持って、一〇一句)を持って、一〇一句)を持って、一〇一句)を持って、一〇一句)を持って、一〇一句)を持って、一〇一句)を持って、一〇一句)を持って、一〇句)を持って、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一〇句)を表して、一句)を表して、一句)を表して、一句)を表して、一句)を表して、一句。

後の五時ごろだつた。(路郎生)が、不朽洞山房を引揚げたのは午 い風が吹いてゐる。幹事や私たち四十八滝へ吟行を試みた。外は寒 成して貰ひたい。 いだ人もあつたが、大牛は赤目の一同、朝食が濟むと、職場へ急 この調子ですすんで作家自身を完

ます。支部員一同張り切つ 本年も相變らず御柳交願ひ 山口縣大島郡久賀町(路三方) 川 雜久賀支部 同幹 電話久賀局三番 大西 吉 鹤 外支部員一同 村猪 岡 田 本 田村

太 朗路

鷺 川柳

三水浦

休城東郎

姬路市西町之坪

中深森船笹木岩岩狩角角西本萩夷 野津田津野下崎崎野谷谷垣丸原 播雄雪坪草和揚樹燕凡凡良 水坊美美花水甫甫子水夫甫步葉笑

大 科 高 野 西 當 大阪市阿倍野區晴明通 特 殊 紙器 種 野 亞 工業株式會社 美 鈍 介

謹 新 (柳人交歓のページ)

割勘へ素早く礼を云うて立ち 薄情な人だつせえーと忘れ兼れ 二三人すけなく 残す街のバス はらませておいてすけないことを云ひ 薄情な男と知らず嫁が來る 薄情な顔煎餅のやうに見え 雇仲居さん客の身なりを見て座り 薄情はなゝめに向いたまゝ座り 薄情に 蒲園我子の方へ掛け 槍てられた女女給になると決め 薄情に見えたは愛の鞭でした 薄情をごまかす酒となりにけり 薄情 と云はれうなづく薄情さ 財産がハッキリわかり養子逃げ 保險金あてにされてるのをなげま 中風だんれと奥にほつとかれ 商質は別さときつちり拂はされ さて金となると友達甲斐もなく 薄情と未練へ雨は降りついけ 薄情な、日傘きり~~廻すだけ 薄情な男東京で叉出会い 薄情がごうしたのよと流行ツ妓 つれないと云うのをはんぶ聞いて出る 物乞ひにふと 薄情な 顔を向け マスクして薄情らしい座りやう ごたん場で他人はすけないことを云ひ お互ひにきつちり座る 薄情さ だます 氣の 化 粧を 知つた糠袋 ハガキすらよこさなくなり寒いこと 合渡したのに宿の飯の間 情な話と知らず手を仕へ 情でないのが判る三幕日情でない薄情は涙ぐみ 情な女にこりた 情な瞳には女のありあまり れてくれと社長は金ですむっちり 情も金の力 な男今頃 鏡を拭くばかり が終は板につき から 頼つて来 はすのか 電 話 П 小同同同同同同 松 閩 同同同同同 同同 同 同 同 同同 同同同同同 同同同同同同 H 同 司 同

> 肩越しにターンしていった冷たい眼 薄情と言はれ 部長にのし上り 薄情 薄情な 人を冷たい椅子で待ち とかくの論我薄情は棚に上げ 薄情にされても切れること云はす 薄情へいさかふ術もなく辞しぬ薄 情 と 云はれ 笑ろてる老獪さ かくて秋男は姿かくしたり 薄情になったは親が死んでから 薄情へ夜霧は味方する如し 薄情かしらんが法はまげられず 開成金そんな男は知らんと云ふ 薄情を うらみ子 供を味方にし 薄情とそしらばそしれ我貯めん 情な男の金が泥へ散り 活に負けて恩師 な世間へ抗し死を逃び 15 男の髪の白 男の家はも 女 0 写

薄情な男となつて鹿島立ち鬼絵が薄情者にしてしまい教経が薄情者にしてしまい これでえ、やろと安いのを買って臭れ ウインドにみとれる妻をほって行き 実はもう妻がある身といふ便り 薄情 といわれ 鏡をのぞいて見 薄情に自動ドアーが鼻の先 役つけば皆薄情になつていき 薄情な伯 父で 育つて 靴みがき 薄情でかまへんこれがワテの主義 好きな人薄情なこと出來ないの 薄情な見舞はいらぬとことかられ 薄情なとこが親爺によく似てる 情やおまへん 世間は月一や おぼろ君の情に似ておぼろ褥の妻へ質草出 せといふ 知つて女は甘えない 情者のうわさする に一人腹を立て 屋でよく儲け へ反くなり くけ うう背 かりき 沒食子 同同 同 同 同 同 竹同同 同

彦

莊

香

路

情と

同

志薄

な手紙開

73

林

炭もつて來いに幹事はうろくし 税金に炭やく山も押へられ縣道へ出れば炭積む車が來 すき 焼へ 炭だ 洒だの 賑やかさ 恋といふことを知つてる炭いちり 炭 ついで 話の 先 をせかすなり炭 取の 好みもみせた 暮し 向き 炭あ ぶつちやけをどう のがれたか炭俵 炭燒の紅葉が散ろが散るまいが 農繁 の子 供は 炭 を負ふ役目あるとこはやつばり積んだ炭俵 炭もって山越しパーマ掛けに出る 新世帶先づ炭の値におごろいた 炭をつぐ手付も女房らしくなり インフレへ炭ー俵もよう買はず よく來たと炭火拡げた武骨な手)れ あんな処に炭を燒く煙品給の炭が四月の街へ着き 投車炭も山程積んで行き 近し巡査は炭へ謎をかけ ーザンの姿で炭焼下りで來る 車まで一服すおう木炭車 を 牛ふり 分けに 炭つんで 村は木 炭バスの 中 ろとこ 同同 白同 司 同同 同黎同 同 同 方 同 同 柳子

光

薄情をまじめにきいてあげる夜胸 病めば來ぬ薄情な 人となり薄情は一寸にらんだ真似をする薄情をうらんでもみる片だより 有り余る金が有るかと断はられ降情な旦那へ手相見て貰ひ 薄情においとけぼりをくつた猫 薄情の袖口きれてゐたりけり 薄情に馴れ内職も板につき 花名刺薄情を知る特となり 神棚の下薄情がついく也 薄情は毒薬のあるのも知つてぬる 薄情 をポンチ四 十で 悟つたり da. 一へ仕 送りだけの 母へ泣い L 7 た十八九 志 同同同梨同同同同 鲇同同同

里

風

美

郎

賀 春

Æ

Ш 柳 雑

誌

社

池に月うつして夜中すごくなり守衛ふと自分の影にぎよつごする 且那フト夜中に起きて去れる云ふ 又お隣りと間違はれた夜中すぎ 夜中ふと群拔を読むいる役 通夜の座にきむくしと時計二っなり 酔ひつぶれまあ夜中までほっとかれ 夜中一人端座して子に記り妻に記り こんな世界もあるのか夜中虫すだき ごちらからともなく真夜中に話かけ 図 禁の 書を 読む 夜なり風の音 雨の洩る夜中亭主をあわてさせ 真夜中をひゃかされてるワンタン屋 刀 もつたのが ふるへてる 夜 中 檢に女は寒く座つてる 旦那夜中に 藝 者つれて 來 者

大阪はこわいところと知る夜中死んだらし夜中に鉦が鳴つてぬる 夜中まで待つて女房は叱られる もう夜中でつせと仲裁のあほらしさ 電車もうないのを知って出てうせる 鼠やがなと親爺なかく、起きななり 夜ル夜中釣に行く日の火を起し 月天心夢の続きがほしくなり サラノーと夜中の夢にゆきが降り 眞夜中をやみ屋を乗せて走るなり 田舎驛灯はあか~~と夜中なり 勤めならうしみつ頃を帰るなり 夜中から仕事にかいる人もある 真夜中の月走つてる 大金を夜中によんでふり返り エロ本へとつくに二時はすずにけり ハイヒール夜中を歩く音となり ハイドの氣持で夜の街ゆく へ送り 生同同同同同文同同同同同同同可同同同同同同 靜 里同 同 司 同 同同 十九九 々庵

蝶、

登

秋

郞 脚 生

いた。卜占君の生活はいたつて素話と、それからそれへ話に花が咲 伊太吉の諸氏だと知つた。▼八代占君の紹介で、魚屋、銀風、夏生 を放りこんで吳れた。僅な停車時 つてからの話、目下の生活状態の 代の話、まだ戦時中に、八代に移 と私との親交のはじまつた奈良時 の塵を一掃した。夕食後は卜占君 くりの温泉に入れてもらつて、旅 表札が私の眼を射た。卜占君手づ た。川柳雑誌社八代支部の大きな に揺られて河原町の卜占居に着い の街は帶の様に長かつた。厚生車 会の代表的な柳人たちだつた。ト 四人の出迎えをうけた。八代川柳 つたと大きな欣びを感じた。外に 私もト占君の額を見て、來てよか も懐しそうに瞳を輝かしてゐた。 改札を出た。そこには卜占君がさ 八代驛に着いた。ことで下車して 後日を約した。▼十六時四十七分 間なので、二人は慌ただしく談し 君が駈けつけて、タバコとりんご 車窓から首を出してゐたら、抱逸 たか汽車が大牟田驛に滑り込んだ て選句を続けた。▼十五時頃だつ や「近作柳樽」の句稿をとり出し ▼車中ではトランクから「川柳塔 といふ印に名刺を渡しておいた。 会議中だとのことなので通過した 室から牛休君に電話して貰つたが 関に着いたのでプラットの瞬員の つた。▼五日の一○時二○分に下 ・九時三〇分の應兒鳥行急行で発 大阪を十一月四日(廿三年) ト占君の生活はいたつて素 一人旅なので一睡もしなか

揚げられた大島濤明氏も観出しさ は高田抱逸氏が來熊、大陸から引 は大举して出席してゐるし、福岡 の主催である。世話役は田中辰二 柳会に出た。会は縣、市、放送局 神社で開催された熊本文化祭の川 にはいゝ遊び場だ▼十時すぎ世継 の影ももとごめぬ清麗さで街の人 川家の庭園だつたところで、敗戦 水前寺公園に出かけた。こ」は細 と、一行に別れて、私とト占君は 出るのである。汽車が熊本に着く 代の柳人が大举して熊本の句会へ にのせてもらって、駅へ出た。八 すと他の人たちもそれに署名した にうれしい今日の日よ」の句を汚 興に乗じて私が 襖に、「生 殘り組 帰られたので、夕食を共にした。 ているところへト占君が会社から 銀風の三氏が來訪。しばらく談し 占居へ戻つたら、伊太吉、夏生、 か天草行の船」の句が出來た。ト した。▼八代港で「夢のせて行く 一人で八代の街や海岸をプラく れたりした。こゝでト占君と別れ たり、八代観光俱樂部に柳人を訪 八代名産の高田焼の店を紹介され 頃からの旧知だつた。▼それから とは奈良縣観光課長をされてゐた 氏を訪れたが生憎不在だつた。氏 君の案内で土地の名望、坂田靜夫 ゐるのであつた。▼六日の朝、卜占 ゆとりにト占君は川柳を樂しんで のないことを知つた。斯くて心の 君を扶け、令嬢令息の生育に余念 奥さんは百姓仕事をして懸命に夫 りますとの話だ。それを聞いて私 からは大神梨雨江氏、大牟田から 氏(五高教授)である。八代から ▼七日の朝、ト占君の自轉車の尻 も自分のことのやうによろこんだ も土地も買つたし少しづゝはのこ 朴だつた。しかし堅実だつた。家

ト占君には氣の毒だつたが額も洗 う一睡もしなかつた。▼九日の朝 してゐるやうな音がして、とうと 後方で、絡夜ト ラクターを動 放送原稿の補筆をいそいた。宿の たら消燈してくれと云はれながら 竹の丸旅館に入った。十時になつ 知の岡山氏だつた。 はず、朝飯もとらずに、放送に出 かけた。主任は大阪の放送局で旧 つくなりすぐ

稼」と云ふ句が出來た。大急ぎで 天地だ。比較的川巾の廣いのもう 幾つかのトンネルを抜けて人吉へ になつた。朝早く八代を発つた。 日帰りで人吉温泉へ出かけること とになったので予定を変更して、 の朝、熊本放送局から放送するこ 君の予定にはあつたが、私が九日 た。▼八日は人吉温泉一泊とト占 居へ帰り、一盞傾けて眠りについ で、セルバンでお茶を喫んで歓談 あた。「落ち行く先は

九州相良共 のもうなづける。二階からのぞく 晝前に着いた。川沿ひの鮎屋旅館 思つた。▼散会後、田中氏の案内 と若い女が二人、障子洗ひをして れしく、人情がこまやかだといふ に入つた。人吉は山で囲まれた別 した。▼夕刻の汽車で八代のト占 氏に指導をうくる人たちの幸福を 說かれた。温健そのものゝやうな ちだ。田中辰二氏と私が講演した 田中氏は多数例句を挙げて諄々と まさに肥後文化の花が咲いたかた 六七十名の柳人が一堂に集つた。 れた。郡部からも多数参加して約

が二十時近くだつた。田中教授が 八代を通り越して熊本についたの

た。▼放送局の近くだと云うので わざし、出迎えられたのに恐縮し

鳥取支部川端柳社●日の丸川柳會

川柳風見草吟社 川端三丁目十五

温泉に茂つた。温泉から出ると、

一盞傾けながら放送原稿を書いた

そして十六時二〇分で引返へし、

武 田 岡 髙 中 杉 本 田 田 田 尾 田 中 村 田 谷 島 天 H 貴 穗 赬 英 秋 盈 重 IE. 湖 鉄 保 美 滿 波 女 雄 錢 子 子 男 美 民 州 Ш

昭和印刷社方

对村 味平的桃東代女

全遞大阪遞信病院支部文化部川柳會

兵庫縣多紀郡篠山町小川 川雜篠山支部 町

編輯局 相談役 事

長

田酒久木尾岡井池津中井井村崎野上戶村 中井神柳下 克良露桃神 人郎郎成正子芳村峰 水小森中吉市西吉坂若高西南中多 谷田中 田田場辻村根林山川 竹史愛晴斜食竹稀カ草野惠修葉禿 莊葉論夫水子青嗣ズ右草風郎子天

鳥ヶ辻同人 (順不同)

(柳人交歡のページ)

諽

賀

新

春

藥 吟 題 課 選子食沒場市 瓶

大薬 お薬 日薬薬 のせたお盆 感 の ある薬瓶 同葉同吐同元同美幣錦一笑雞梅乔奇七正日松草小北 水 面 灣 洞月風舟泉光風草朗山司子雄々楼路

軸天地地人人人

を祝 洗 つ て 返 す 退 院日祭 瓶 洗 つ て 返 す 退 院日俗名をといめて楽瓶しづか俗名をといめて楽瓶しづか水 方 水 で ぅ す めた 薬 瓶楽瓶のむべからずの 色をつけ 医薬 よ薬 味き 薬薬 薬薬薬薬薬薬薬 浴 告 大薬 頼 薬薬 見 5 な服負啄部木士いてめ 薦も 知り書を捨てかれて 員けた顔で持ち 本の歌に ぬき 本の歌に 俺とぬる でなてくる のでなる。 であきれば、 でいてくる。 でいてくる。 虹めと 線があり 7

不交際喜鮎愛同同幽同交同鮎同不同喜同 弓 二庫月由美論 王 庫 美 = 由

に女性川柳家が四人、会は頗る和だ。魚屋(ととや)氏夫人を筆頭だ。魚屋(ととや)氏夫人を筆頭が搖れる中に、幾多の名吟を生ん数等で微迎川柳会、集るもの約三 てもらつた。その夜は八代市の正外で、名産鮎の塩焼を、満喫させに臨んだ。会場は球摩川べりの野をして八代川柳会 主 催の 歓迎宴 の古本屋をのぞいた。午後は田中済んでから田中辰二氏の案内で街に、放送の椅子についた。放送が 氏とト占君と共に八代へ戻つた。



で歓談、揮毫、田中氏と私は同家席を狸村氏邸に移し、十二時過ま

夏

セムクリップ

立川ペン先製作所

Ŀ 野 市

ごほ

È II

ひちほん ろつぼん さんぼん

II

L

川雜濱寺支部

川 東 吉 吉 吉 中 稻 山 島 村 村 田 野 村 垣 田 生 南 奲 圭 好 星 柸 晚 井 K 風 庵 郎 登 堂 路 鄍

お陽さまに明 木 梅 日 つ 木 梅 日 つ 木 の で 母に克つ子のい♪ぶんを聞いてやり 老母の眉剃 つてとうとし呼吸にふれ すえの 兒の まるさ 心 をとりもどし さんなんはよくこえてゐてかんばりや 父 といふしごとうれしい 五 十の 陽さまに唄をきかせたようきな娘 で だきさく 積指 にうぶ h で心の燈をとぼ 氏 は 箱 の 上 な丑寅 水 谷 鮎 尼崎市西字口開一八 さん 褔 し ŧ 四女 三男 三女 二男 二女 長女 長男 道子 竹喜 愛子 エイ 四 七大 Ξ ħ 七

... **大** 九



投稿清規

切毎月廿五日▼投稿先本社宛確▼開催月日及場所記入▼締▼用紙は原稿用紙▼文字を正

11 作句と話の曾 (本社)

十一月七日 十三時 於 運 寺

鮎美の諸氏が柳話に熱弁をふるはれ、 の会といふこと」した。亞鈍、生々庵 発された留守中の句会なので作句と話 選だつた。夕刻盛会裡に散会した。 いつも主幹がされる兼題は葭乃女史の 今月は路郎主幹が九州の川柳行脚

出席者——鬼子· 小松園・茂・東雀・吸露・竹莊・鮎美・梨光・愛論・生々庵・ 酔月 角堂・春草・里十九・香林・草々 案山子・文蝶・茂勝・美奈子・水駅平・良祐・淡舟・風路・蝸牛・ 客·正和·豆秋·亞 鈍·野介·晴 半・烏莊・ 五郎・ 正司・ 美水洞・ 種美• 葭乃・ 梨里・ すゝむ・ 錦風·南風郎 晩鳥・嘉

とうちやんが一人酔ってる誕生日 兼題 「誕生日」 須崎豆秋選

> 誕生日十日も過ぎて思い出し配給の鯛で淋しい誕生日菊いけて誕生日の洒二合 早よ帰りなはれや誕生日だつでかい 誕生日だつたとおもび寝てしまる 誕生日やがては此見も苦労かな 天瓜粉ふた 誕生の 宥となり 童心に 帰り誕生日とりまかれ 童 新 妻のエプロン白し誕生日 飯 誕ば H 案生文鳥春葉錦山々 子庵蝶莊草平風 豆五 角 堂

針箱に百刃口のカスのくじ針箱へ背を丸うして母達者針箱へ背を丸うして母達者針を乗らおつりがやつと出來 針箱へお 風出 兼題 みくじの古そつと人れ て來た母の 麻生葭乃選 **兎錦春草小** 葉 松園光 莊子風草 Þ

針箱の糸をさらへたのぼりだこ針 箱 ~ 土 産の 鮨の 折をのせ針 箱を机に 母の メモが出來針箱のわきでチンヒラゆするなり 寝てほしい孫針箱へよつてくる 針箱の隅の釦が役に立ち 針箱にもたれチクノへ歯が痛み 長男女男三男針箱がこわれかけ 針箱を開けると 小銭 音を立て 針箱へスナップ写真入れたまま 通す用で針箱から呼ばれ 箱に母が内証の五十 箱もいつかん張で嫁ぐ姉 南風郎 葭 翠亞籌豆默香春淡葉竹 乃

針

兼題「足 袋」 田零光選

西陣に住んで白足袋はき馴れる 足袋はだし負けては居らぬ口答へ 嫁にやることにきまつた十二文 足袋ぬいで履けば鼻緒のたよりなし 足袋はけばダンサー素直な母になり 足費はいて義足は冬至意識せず 一足袋 をはいて嬉しい使 來る かるみへ來た白足袋はぬがまれる 兎春正 吸 風郎 子草司器

氣が付いた時は昨日が 誕生日酔つてもいゝのよ妾の 誕生日離生日二号の方で 配つてる

種默蝸晴

む美平牛峯

嫌炭の穴も嬉しい 誕生日誕生日父の笑顔をみてかへり

支関で足 袋はき 換へた訪問着 その座敷遁れて 女足 袋 はだし

誕生日夜はついましく日誌書く 誕生 日をみんな忘れて皆 達者

誕

下の子の誕生日だけ覚えてゐ

生日 我子に歳をたづれられ

す

放鞄こゝろづくしの足袋も人れ うたた緩の炬燵へ足袋をはず忘れ 白足袋の汚れも派手に酔って來る 古足袋を綴る陽ざしへ猫も來る 足袋かへて駅のそはまで送つて來 インフレに負けぬ地下足袋きつくはき 赤ん坊の足袋附紐の長々と 足袋裏の白さこの娘のいゝ育ち 朱子足袋で大阪馴れた子が戻り 生活のつかれを足袋のうらに見せ 母上の手縫の足袋に有る温み 白足袋が目立つて白い長廊下 足袋の裏少し汚して舞ひおさめ 黎淡兎水葉籌野獸良

嫁入の話へ娘耳かさす嫁に行くつもり返事をにごしょき 嫁入に 近くダンスを 習ひに來花 嫁は 鬘 をぬいでほつとする 嫁入の娘素直な返事する 褶かりもすまし嫁入日が決まり 嫁がせて秋日に白し父の髯 何しても 嫁 入 前だと ��られる 嫁ぐ日の小雨めでたいものにされ ズの 嫁は量をぬいでほつとする 入の話へミシンゆるく踏み 朝を 小犬がつきまとひ 正葉南 **交野晴五水豆愛水** 平郎 蝶介峯郎客秋論客

٧

席題 「靴 清水良祐選

靴靴腿靴靴靴 靴下の派出なは闇のものばかり 新柄の靴 下履 いてもうけてる 下を掘んでくれてる娘が二人 下の破れたまっで焼香し 下の穴を氣にしてハイヒール 円もする靴下に穴をあけ 下に元旦しないつぎをする 下 透る靴下もある女学生下とおんなど色の足を出し 下の穴が気になるひとり者 下の色恋人にまかせとき 下へ若さを見せて戎橋 下の 破れ 気にして靴すべり 下のつぎへ停年近づけり へ継あて」ゐる定休日 東愛亞小 種竹鮎晴春 兎淡吸

小淡香默 松 園舟林平 光舟子客光彦介

穴あいた靴下おけさを踊つてる

出張のカバン靴下二足入れ 靴下もつぎでよい父も老い給ひ 靴下は片 方義 足のさびしい陽

ナイロンと云ふ靴下に触れて見る 靴下の昨日と逆にはいた儘 靴下に下駄つ」かける芝居茶屋

ちり取りを持つた姿勢で小言聞き 靴 下 をぬげばま白き 足 にして靴 下 の片つぼがない 朝 あはて ちり取りへガラスの破れた音になり 営関のちり取り米を掃き込まれ ちり取りにヒヨコ一應足ではれ ちり取りへ落葉すなおな音を立て ちり取りを持った其の手で道教へ ちり取りへ林檎の皮は長くおち ちり取りを持つ手へ落葉二三枚 ちり取りの前で吸殻薬てられる ちり取りに紅葉もまじる秋の庭 ちり取りえ這入りかれてる鉋屑 ちり取りの昨日も今日も芋の皮 ちり取を下げたまんまでまたしゃべり を貫ふた頃がよい日 「ちり取り」 菊沢小松園 案 兎 亞 山 子子 鈍 す」む 良葉種淡茂竹野葉案鮎 山 祐平美舟 莊介平子美 す 牛 風默 水

鈍路平站庵

雜川 濱寺支部句會 (堺)

女山岸敏子さん出席 |田三面子の十三回忌を修した三面子 法律・思ひ出・ 十一月二十三日 晚酌 於生々庵居

狐と狸とが法律をたてにとり 法律の便利なとこだけ覚えとき 六法が手持になつた古本屋 何ケ條にあるせと巡査負けて居す ステッキの先で法律あしらはれ 六法全事人の眼に付くさる。置き とし穴の様に法律作つとき 法科一度は僕もあこがれた 同豆圭同松静籌同文 井堂 夢路彦 蝶

独

法は法いつべん吞みにいきまひよか

酔ひしれて 男 買 吹 されてゐた

看板も 出來て 張り 切る未亡人 看板がハツキリ院めるいい月夜 看板は社 交 闇師の寄るところ ある我を父母とし孤々の声あげる 産声に 祖 母 潮 ざいに手を合せ産声は湯氣のなかから無事な声

あざみ婦人句命

製

天

伊 藤定 美

報

美奈子

若

産声へほのぼのとして、明けか・る 産声へ急にみんなが 喋り出し

同若定花万定同

東 美美子美

男出る幕ではないとへこまさ 尾行する 男の 足に 気付いてぬ

良花

八代子子

ろうそくのろうが流れる晩の酒 晩酌の隣りへ子等は 丸うゐる 鐘の鳴る丘 父・晩 酌の手を休め晩 酌へラヂオ小 唄の 時間なり 思び出がふとわいて出る空の色 思ひ出は田に一すじの道細く 思ひ出はかいしに似たる俺だった思 ひ 出を 辿れば 父の若かりし 思ひ出はセンチになつてはてしまり思ひ出の話でお茶が冷えてゐる握 手 して 別れた 時のあの瞳 新憲法 股 私 に な り給 ひ法律がどうあらうとも子ぢゃないか 晩酌が済めば肩もむ子がならび 晩 酌によい 父よい 兒よい女 唇 お銚子のツュをしばつて飯にする 晩酌の 最後の 猪口は妻に行き 晩酌だらばらくラデオ止めておけ 思ひ出の土地そこはかどのに歩き 思ひ出にたばこの消えたまでをり 思ひ出の写真父さんの丸裸 思ひ出にならぬ様にと焼く手紙 思ひ出のかずく、喰ふ事はかりなら 法律はともかく俺にまかせとけ 一酌は骨をせょつて 好い氣 綾 | 律の前に夫婦の水臭し 豆里文 南風秋九蝶郎 **圭** 井 鄭 南 風 郎 南風郎 里十九 里 籍 籍 松晚 in 生 同 松 文 同 同 貴生 百 登郎 土十九 々庵 山庵 杏 修改

> 男げのないのがこわい母家建ち 男たる 誇り 映画 をおごらされ 嘘も言へす金もたまらぬ男なり

久賀支部句會 (山口線)

十月十八日 於

ボケットをみんなふるって鍵一つ アパートに住んで居ますと鍵を見せ **白路三浦阿** 猪朗

材木の本うな茶柱だがほめる材木の客ちぶれたのがマキになり水の日は間近なり板けづるが木の上ではでいるな用材木の上ではでいるな用が、のよいではできない。 材所復興調を帶びた書 り音頭だけ動き **白** 稔 々星坊

大牟田支部句會 (大牟田

手術室天井にらんだのがひとり 父ちやんの羽根は天井につきあたり天井まで届くと父の肩車 天井・男手・名物・寄附 十月二十六日 高田 地逸報 清 抱 秋逸城

か 過ぎ越し方を絞首刑

持合せなくてカンパを遠ざかり 名物と思ひ食べてもたどの餅 名物は味より箱を愁しがられ 名物は遠くの人によく 知られ 名物は入れ物ばかりよ~出來て 早産へ男手だけのあわてやう ちようご來た甥は瓦へ登らされ 切りの寄附へ家内が不在なり 手によくこれまでと子をあり 婆 呼びそれで男 手 役はすみ つれ 松清 かれ 夫 柳 同抱同 Ш

一月六日午后 篠山支部句會 (兵車縣) 小西無鬼報

時

虫配通初秋

撫でられるつもりか猫の眼をもり眠り猫まだ徳川の世と思ひ 解散で又うそつきに郷里へたち 猫の眼の様に彼女の氣が変り 散をして先生もホツトする 猫の眼・解散 無養 無 養蠶 鬼花四

の 丸 句 (鳥取)

b髪・盗む・バス・入歯・市長十一月十五日 於職場耶務所 秋冷・絞首刑 といれる 入営・市

嗚 呼 夢 か 過ぎ越し方を絞首刑終 首 刑 善 然 な り と 思えごも 秋冷えの風呂に首だけ見せた数 秋 冷えに 破れ 障 子の小言訊き招かれるばかり市長の忙がしさ 市長今日市会がもめた無口なり 何、入험金でも拾つてからにせる 孫達が入歯の眞似をしてみせる **微員バス質が三角になるやうた** 順番え床屋逃さぬ椅子を貸し パンクしたパスから街が其処に見え 盗難え斯くまでやけになることと さゝやきはうれし唇盗まれる アツしまつた今迄確かあつた筈 肉え箸をつけない総入物 一まれた筈の唇おさえてみ п 下悠然と散變屋 と子をあやしつ・顔を剃り 貴 秋 同 美 女 男 芳 貴 道 道 湖秋芳颜日 R 日重喜 H 日 秋 灣 子美弘 漪子 美

> 二十後家 絞首 刑とは氣の毒や地球今かたづをのんだ絞首 刑終れば月と 虫ばかり絞首 刑母肉 親のように聞き 床屋での話も今日の絞首刑絞首刑案外樂に死れるそう 屋での話も今日の絞首刑 鷺 盈民小を盈 之雄松む之 H

十月十七日 祭·落葉·茸狩·巡查 於樹甫宅夷一笑報

茸 狩 にいわずかたらず 競 爭し 秋 深 し 乾 い た 音で 落 葉する 銀杏散る下でオルガン鳴り止≥♥ 汲置の水に落葉の二つ三つ落葉する木もなく住んでいっき秋 遅刻して交通巡査がうらめしく **茸狩のみやげを待つて夕ごはん** 0 給過孫祭 球額の事迄批評され

弟はグローブ持参で 遊びに來 プロ野 市市

O

書は昨夜の月をほめてゐる 十月廿五日 の タ ドン喫茶店 海洋人 美彦

月千々にくだけて海の廣さなる手を引けば影も手を引く月の途 ほゝ杖で喰ひ入るとらに月を観る 戸締りを月ものぞいてゐてくれた 名月と一緒に浮ぶ舟世帯澗月へ犬が片足あげてゐる 前うしろ右も左も月夜なり 月明り河を渡つた開仲間 蝙蝠よ三日 月さんだ遠出すな 噴水は月をくだいて 暇がなし 月の夜のマンホール巨きな口かって 十五夜の月はおまへとわしのもの 窓から見る川坊やに見えてくる 美水豆角香**翠同**鮨 奈 子車秋堂林光 美 M 車秋堂林光

輯室にて

の御支援を願ひたい。 稿と、誌代の廉價で好評を博して て活躍を続ける方針である。倍旧 來た本誌は本年も、この線に沿う 明けましてお芽出度う。良い原

お馴染みの稱瓜平画伯を煩けした 不朽洞山房徹夜句会の図にした。 本号の表紙は一寸趣きを変へて

られた。作家の字井無愁氏は「川 柳はユーモア文学の一類」を、自 馬氏は「柳樽の女流作家」を寄せ 分は「牛の句を拾ふ」を執筆した 新春号特別読物として富士野鞍

イルで復活

川柳壽座」や川柳不朽洞会の名簿 は割愛した。諒とされたい。 スペースの関係から、拙稿「続

の楽

和使節の役目を果す事となった 字が印刷されて米大陸へ進出、平 イン・オキュバイド・ジャパンの文 拙著「新川柳講座」はメード・

川柳行脚に出かけて、各地柳人となった。昨年は秋かち冬にかけて げる機会をつくつていだだきた の親交を深めた。本年も寸暇を割 いては出かけるつもりだ。 近來、各地とも、句会が盛んに 腰を上

本社の忘年川柳会は十二月十

出席夕刻散会後、支部同人と不洞年記念川柳会を開催路郎主幹夫妻十九日午後一時から支部創立二周開いた。▼川雜渓寺支部は十二月 阿倍野支部は十二月十八日午後六 川柳会を開催路郎主幹出席▼川雑 は十二月十一日午後二時から忘年 に開催した▼大阪遜信病院川柳会 二日午後一時から一運寺で賑やか を開催路郎主幹出席散会後、支部 洞会員にようて祝賀宴で氣勢を挙 六日午後四時から同社四階の皐月 から阿倍王子神社で忘年川柳会 た▼扶桑金属川柳会は十二月十 人と不朽洞会員により忘年宴を

同

時

出席▼南海電鉄忘年川柳会は十二 催された。各代表選手が必勝を期日午後三時から廣鉄職員会館で開 れ路郎主幹夫妻出席▼廣島鉄道局 幹田席▼関西配電の先陣川柳会が 月十七日午后四時から開催路郎主 の間で忘年川柳会を開催路郎主幹 しての作句ぶりに應接の川柳人造 理部の川柳コンクールが十二月三 廣島管理部、下関管理部、 十二月廿三日午後一時から開催さ 同管理部の浜田久米雄氏が一等賞 路郎師。岡山管理部が断然優勝、 も手に汗を握らされた選評は麻生

をかち得た▼川雜岡山支部、 岡山管 備前支部、岡山鉄道管理部文化サ

川柳で、靜岡放送局から榎田竹林市)は大晦日の夜、大晦日風景を 月十五日に、香林、里十九、水客 走川柳会を開催▼北大阪支部が一 柳会(姫路市)は十二月十二日に師 川雑備前支部では十二月廿六日久 会議所で開催され路郎主幹出席▼ を打切つた▼冨士野鞍馬氏 二十五日の集りで季題川柳の研究 ととなった▼DONの夕は十二月 紫香、潮花氏等の手で覆活するこ 米雄居で忘年句会を開催▼白鷺川 十二月四日午後一時から岡山商工 ークル川柳部、岡山地方川柳会が

課 手奏・古典・新舞踊 の単語・田舎 洋裁・鬱道・日本書 茶道 韓道(小原流・未生流) 詳細お問合せは 服飾デザイン 長唄・小唄・路曲 七階文化クラブ事務所へ 目 (表千家流・宗徧) 屋

電南一一七一番大 阪 日 本 橋

喫茶室. 休憩室. 有料会醫室

映画器.大食堂も近く完成予定

清談・

鉄

商談・お待合せに

點西北角 上六交叉

見送り 張 課題吟募集 (十句) 大西 (二月五日梅切) 八 步 選 選

出

每号募集 (每月五日編切) (十句) 國弘 (三月五日編句) 4 林

文章(評論・研究・慇想其他)川 柳 塔(雜 脉) 麻生路郎選近作柳樽(雜跡廿句) 麻生路郎選 章(評論・研究・感想其他)柳 塔(雑 詠) 麻生路郎選 規

▼『近作柳梅』は 一般作家の雑吟 所氏名雅号を明記する事。 ・投句は各種必ず別紙に認め、住 を募る。 『川柳塔』 員に限る。 への投句は不朽洞倉

B列b号 毎月一 回 第第 一日発行 四

(戴轉葉) 昭和廿四年一月 昭和廿三年十二月廿五日印 一ケ年概算 金二六四円 金一三二円 (送料二四) 金二〇 H 発 Щ

大阪市住吉區万代西五丁目二五零地 川柳雜誌 振转巾魔 大阪 七五〇五〇

発行所

大阪市住吉區万代西五丁目二五署地

麻

生

郎